



イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 559 回 マタイによる福音書 第 13 章

2014.1.12

昔からクラシック音楽をこよなく愛し、特に JS.バッハや A.ヴィヴァルディなどのバロック音楽をよく聞いてきた。聞けば聞くほどに、西洋の音楽(芸術)とキリスト教との深い関わりに驚愕する。JS.バッハの『マタイ伝による受難曲』は最高傑作だと思っているが、JS.バッハに限らず賛美歌や聖歌、ミサ曲、モテット、カンタータ、コラール、オラトリオ、レクイエム等々聖書を題材としたたくさんの「宗教音楽」が存在する。

小生、幼稚園が偶然「聖公会」だっただけで、クリスチャンではないが、どうしても聖書を知らないわけにはいかない…そんな思いから旧約、新約共に Bible を何度となく読んできた。

『マタイによる福音書』第 13 章(第 25 節~30 節)に、こんな話があった。

…人々が眠っている間に敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った。

芽がはえ出て実を結ぶと、同時に毒麦もあらわれてきた。

僕(しもべ)たちがきて、家の主人に言った、『ご主人様、畑におまきになったのは、良い種ではありませんでしたか。どうして毒麦がはえてきたのですか?』

主人は言った、『それは敵のしわざだ』。

すると僕(しもべ)たちが言った『では行って、それを抜き集めましょうか?』

彼は言った、『いや、毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない。』

収穫まで、両方とも育つままにしておけ。収穫の時になったら、刈る者に、

まず毒麦を集めて束にして焼き、麦の方は集めて倉に入れてくれ、とお願いしよう!…

キリスト教的に言えば、人間の知識をもって、信者と不信者との限界を明瞭にしようとする時は、往々にして不信者を除かんがために信者をも抜くことがある。それよりはむしろ毒麦であっても麦を犠牲にしない方が必要である。ただし明瞭に麦と区別し得る者に対しては、これを除くべきことは必要である。こんな例えから、人は審判の日を前にして、自ら他を裁いてはならない、故に毒麦はこれを除かずして収穫の日を待たなければならない。

今すぐ、白黒ハッキリさせて、すっきりしたいという気持ちは分かる。往々にして我々は結果を急ぎ過ぎる。しかし、まだ灰色でしかない段階で、それをやってしまうと、判断を誤る可能性が高い。時には、灰色のまま、ガマンして待つてみること、それが賢い方法かもしれない。

パソコンが仕事を差配し、スマホが必需品になった今、効率化と便利さ、スピーディが真情となってきた。せっかちで、短絡的な傾向がはびこって、結論を急ぐあまり人間的誤謬を招く恐れがある。それは恐らく熟考とは無縁な、場当たりの対応かもしれない。ベターではなくベストを目指すために、もう一度再考する、見直す、代替を考える、そんな手間が必要だ。マタイの真意とは違うかもしれないが、イケケン流の勝手な解釈を聖書から頂いた。